

2017年5月28日(日)

## 説教:「分断をこえて」

聖書:ルカによる福音書10:25~37

あるユダヤ人の律法学者がイエスを試そうと目論み、「何をしたら神の国と共にもたらされる永遠の命を嗣継することができるのでしょうか」と尋ねます。イエスは律法学者の目的に気がつき、直接的な答えは与えません。最終的にイエスは、善きサマリア人の譬えを語って聞かせ、「あなたはこの三人のうちでだれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」と、質問に質問で返します。

律法で言う隣人愛はユダヤ人同士に限定されていました。善きサマリア人の譬えでは律法で規定されている「隣人」を助けなかった祭司とレビ人の姿が描かれています。彼らが殺されかけているユダヤ人同胞に対し見て見ぬふりをしたのは、宗教的な理由も大きかったのも、ある見方をすれば律法に大変忠実であったといえるのかも知れません。しかし、人の手によって細分化された律法の一つ一つを忠実に守ろうとすれば、『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また隣人を自分のように 愛しなさい』という神の戒めに矛盾してしまうことに気付かされます。

ユダヤ人にとって、サマリア人はけがれた異教徒であり、差別の対象でした。自分が見下していた相手がこのように「隣人愛」を実践した話を聞いて、律法学者はどのように感じたでしょうか。

このイエスのたとえ話は、単に隣人愛を行いなさい、という勧めではありませんでした。イエスご自身、ユダヤ人とサマリア人の分断を注視していたことが 聖書からはわかります。この譬え話にはイエスの深い祈りが込められています。そしてイエス・キリストの祈りというもののは実現することが約束されています。私たちの日常はしわ寄せや破れ目だらけで、まだまだ平和とはほど遠い社会・世界です。

私たちの主は、隔ての壁を打ちこわし、分断された人々を結び直します。そのような神に従いたいと願う私たちは、結局のところ、隣人を愛することでしか神を愛していることを表すことはできないのではないのでしょうか。

神ご自身が神と人、そして人と人の関係を修復されます。しかし私たちにはまた、私たちを分ける分断の裂け目を超えていけ、という神からの促しがあります。「誰がこの人の隣人になったと思うか？」との問いは、「誰が私の隣人であるのか」定義し、隣人愛を行う相手の範囲を定めようとする私たちをハッとさせるものです。(國分美生)